



# 泌尿器

企画：武中 篤

(日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会理事長，  
鳥取大学医学部器官制御外科学講座 腎泌尿器学分野)

1853 年，尿道・膀胱を観察したフランス人医師がはじめて「内視鏡」という言葉を用いたと言われている。その後の泌尿器科診療は，内視鏡技術の進歩とともにあったと言っても過言ではない。つまり，泌尿器科医は常に低侵襲性と機能温存に配慮した外科的治療を行ってきた。

今回，泌尿器科内視鏡治療における最新のトピックスを紹介する。まず，尿路結石に開放手術が施行されなくなって久しく，現在施行されている内視鏡手術のトレンドを紹介する。次に，泌尿器科はロボット支援手術においてはパイオニア的診療科であるが，その現状と課題，そして現在承認されている複数の新規ロボットについて解説する。次いで，良性ではあるが QOL に大きく影響を及ぼす前立腺肥大症に対し，近年さまざまなモダリティを用いた低侵襲治療が登場したので，これらを紹介する。最後に，尿路上皮がん治療に対する久々のブレイクスルーである光線力学診断を用いた尿路内視鏡手術について紹介する。本章を通じて，泌尿器科の進取の気性を読み取っていただければ幸いである。